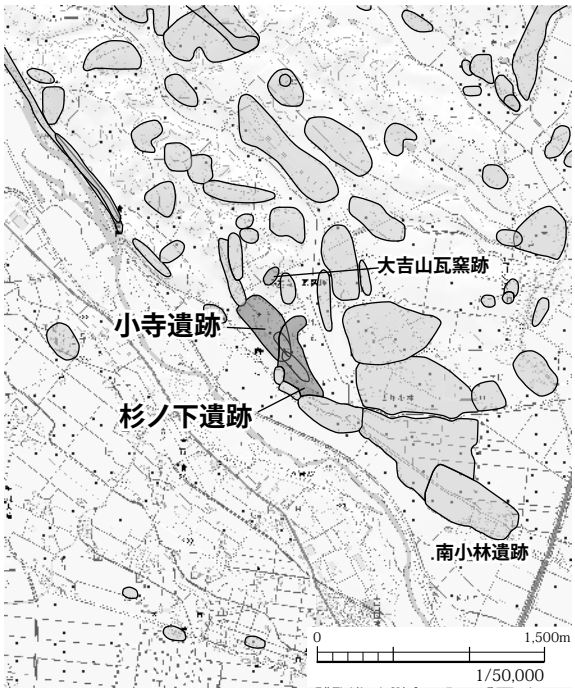
小寺（こでら）・杉ノ下（すぎのした）遺跡

大崎市教育委員会　早川文弥

所 在 地　宮城県大崎市古川清水、古川小林
立地環境　江合川左岸の清滝丘陵の南端部標高 35 ～ 50 m
発見遺構　築地塀、掘立柱建物、竪穴建物
年　　代　８世紀前半～ 10 世紀初頭

遺跡の概要

小寺遺跡及び杉ノ下遺跡は大崎平野の北部、江合川の左岸に並行して北西から南東にのびる清滝丘陵の南端部付近に立地する（第１図）。この丘陵の標高は 35 ～ 50 mで、南側から東側に広がる水田との比高は約 20 mである。両遺跡は後述する築地で囲まれており、一連の遺跡と考えられている（第２図）。遺跡の周辺には南小林遺跡や国指定史跡大吉山瓦窯跡など奈良・平安時代の遺跡が所在している。



第１図　小寺遺跡、杉ノ下遺跡の位置

【小寺遺跡】

1992 年に道路改良工事に伴う発掘調査が行われ、築地塀（以下、築地）、整地層、掘立柱建物２棟、竪穴建物５棟、溝５条、土坑５基が確認された（第２図）。調査区南部の平坦部に竪穴建物が集中しており、北部に築地等の区画施設がある。築地はほぼ同位置で新旧２条が確認されており、旧段階ではさらに修築されているという、３段階の変遷が確認されている（第３図）。

第１段階では、旧表土及び地山を掘り下げて整地し、築地を構築している。基底幅は約 2.4 m、最大残存高は約 1.2 mである。

第２段階では、前段階の築地を削平したのち基底部を嵩上げし、その上に前段階と同位置に築地を構築している。基底幅は約 2.1 m、最大残存高は約 60㎝ である。また、嵩上げの際の整地層から掘り込んでいる柱穴が確認されており、この段階の築地に伴う櫓状建物があった可能性が考えられている。

第３段階は、前段階までの築地を削平し、さらに嵩上げして整地したのち、南側にわずかに移動して築地を構築する。基底幅は約 2.4 m、最大残存高は約 1.2 mである。また、第３段階の築地構築時の整地層を掘り込み、築地を跨ぐかたちで南北１間、東西２間の南北棟建物が確認されている。この建物は、築地に付属する櫓状建物とみられている。第１・２段階の築地は伴う遺物等が出土しておらず年代は不明だが、第３段階は、崩壊土や櫓状建物の柱穴等からロクロ調整土師器が出土し、崩壊土上層で十和田ａ火山灰を確認していることから、９世紀以降で 10 世紀初頭以前のものと推定されている。

築地の痕跡は調査区外でも確認でき、調査区の約 70 m西側では南側に方向を変えるコーナーが確認されている。また、東辺は丘陵に沿った約 240 mの杉ノ下遺跡の北部付近まで確認しており、築地はさらに南に延びていると推定されている。したがって、遺跡の範囲は調査区付近を北西端部とし、南東方向に延びて杉ノ下遺跡も含み、築地の痕跡は残存しないものの南辺は北辺と同様の丘陵端部となる範囲が想定されている（第２図）。この範囲は北東－南西方向が約 220 m、北西－南東方向が約 760 m

である。

竪穴建物は、築地の南側約 60 ｍで５棟検出している。これらは保存状態が悪いものが多く、検出段階で既に床面が露出しているものや、全形を把握できないものもある。比較的残りが良い SI05 は出土須恵器の年代から、８世紀前半頃と考えられている。

【杉ノ下遺跡】

水田改良工事に伴って、1988 年に第１次発掘調査が行われている。調査では、竪穴建物１棟、溝２条、土坑２基、整地層などが確認された（第４図）。整地層は４枚確認されており、SX3 整地層上面に十和田ａ火山灰が堆積していることから、SX3 を含めた SX1・2 整地層は 10 世紀初頭以前の整地であると考えられている。竪穴建物は整地層のうち最も古い SX1 上面より掘り込まれている。規模は東西 3.7 ｍ、南北 2.2 ～ 2.7 ｍで平面形は方形である。方向は北で約６°東に振れている。年代は、出土した須恵器が名生館官衙遺跡 SD1187 溝や伊治城跡 SX324 遺構から出土しているものに類似していることから、８世紀後半頃と考えられている。カマドや主柱穴は確認されていないが、西隅では直径約１ｍのピットと東隅には焼土を多量に含むピットが検出されている。

また、1999 年には、ほ場整備事業に伴って第２次調査が実施され、掘立柱建物１棟、溝７条、土坑８基、整地層などが確認されている（第５図）。整地層は丘陵端部で確認されており、東西約 32 ｍ、南北約 57 ｍの範囲と推定されている。８世紀前葉から中葉頃と考えられる瓦を含む層上で整地が行われ、且つ整地層を掘り込む土坑の堆積土中に十和田ａ火山灰の１次堆積が確認されていることから、整地の年代は８世紀前葉から 10 世紀初頭以前の間に求められている。

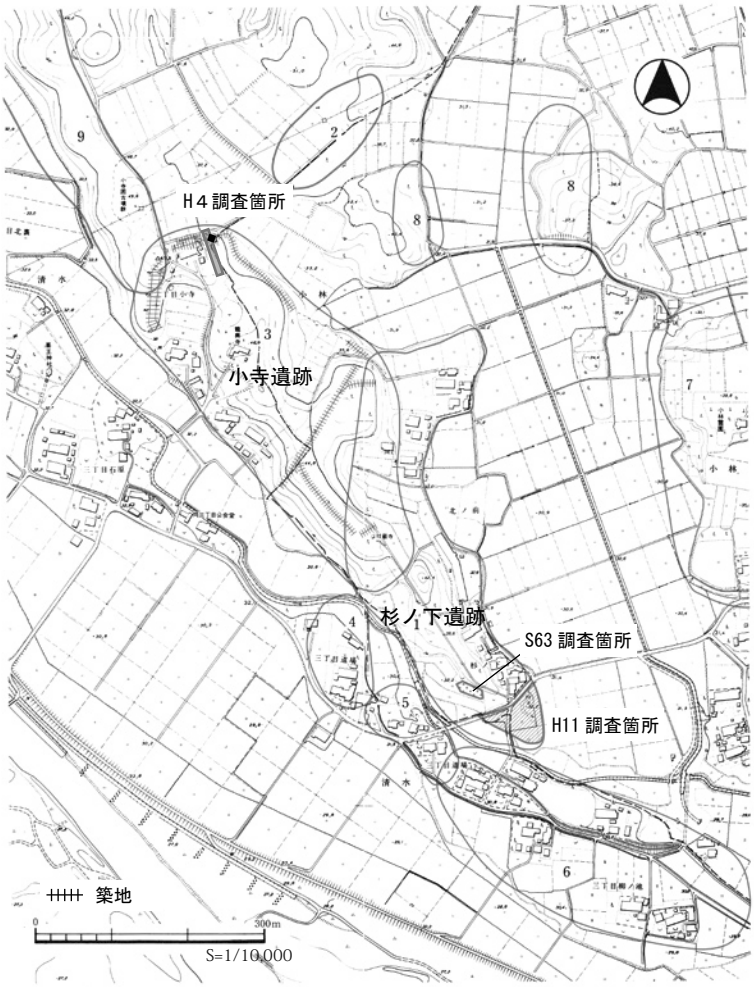
SB7 建物は桁行５間、梁行３間の南北棟総柱掘立柱建物である（第６図）。桁行は東側柱列で 16.1ｍ（柱間寸法は 3.20 ～ 3.25 ｍ）、梁行は南側柱列で 9.8 ｍ（柱間寸法 3.2 ～ 3.4 ｍ）で、建物自体は北で約７°東に振れている。SB7 は古い段階の整地層（SX23a）を掘り込んで建てられており、建物より新しい柱穴（SX21）から９世紀後半頃と考えられる四重波文軒平瓦が出土していることから、年代は８世紀後半から９世紀前半頃と考えられる。また本建物は周辺から多量の瓦が出土していることから、瓦葺きであったとみられている。SB7 は、丘陵端部の低地で付近を河川（SX27）が流れる場所に所在していることから、河川による物資輸送の利便性を考慮して建てられた倉庫の可能性が高いと考えられている。

関連文献

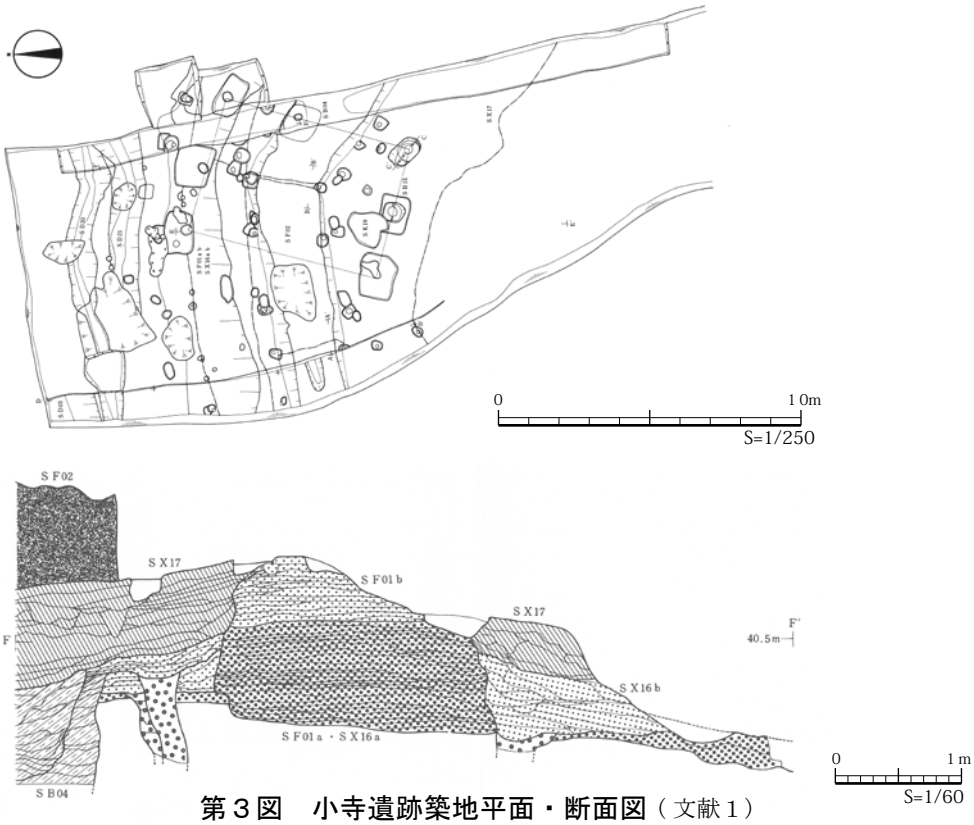
１　古川市教育委員会 1995『小寺遺跡』宮城県古川市文化財調査報告書第 18 集

２　古川市教育委員会 2003『灰塚遺跡　杉ノ下遺跡』宮城県古川市文化財調査報告書第 32 集

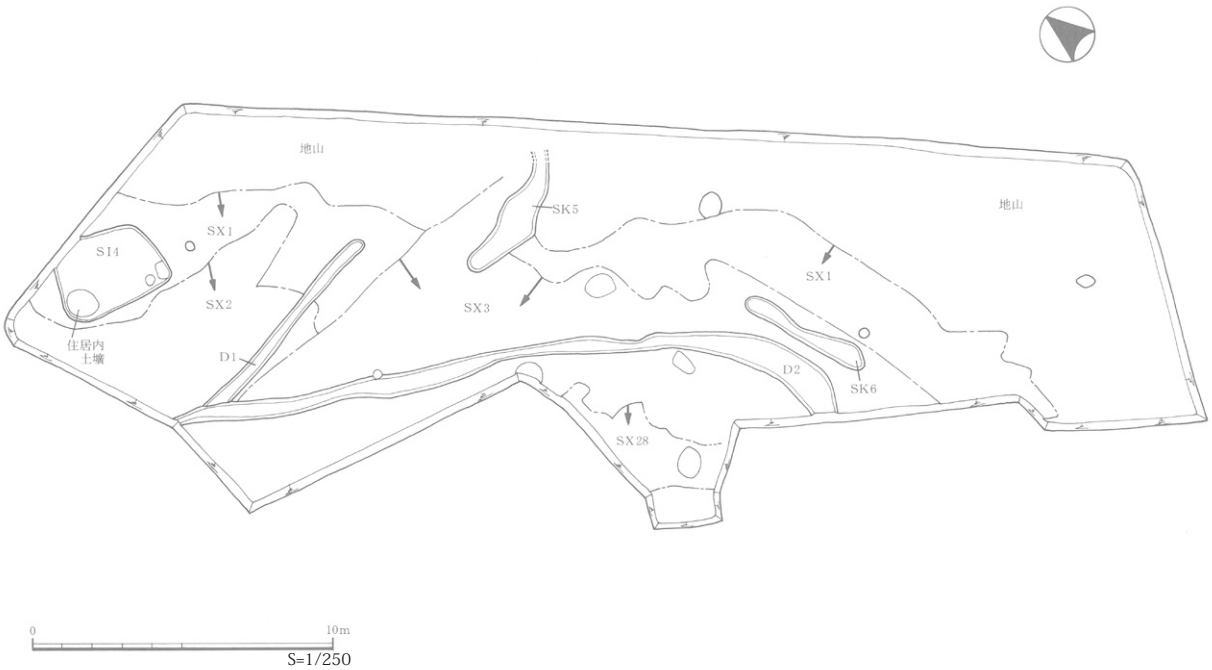
３　宮城県多賀城跡調査研究所 2022『大吉山瓦窯跡Ⅰ』多賀城関連遺跡発掘調査報告書第 37 冊



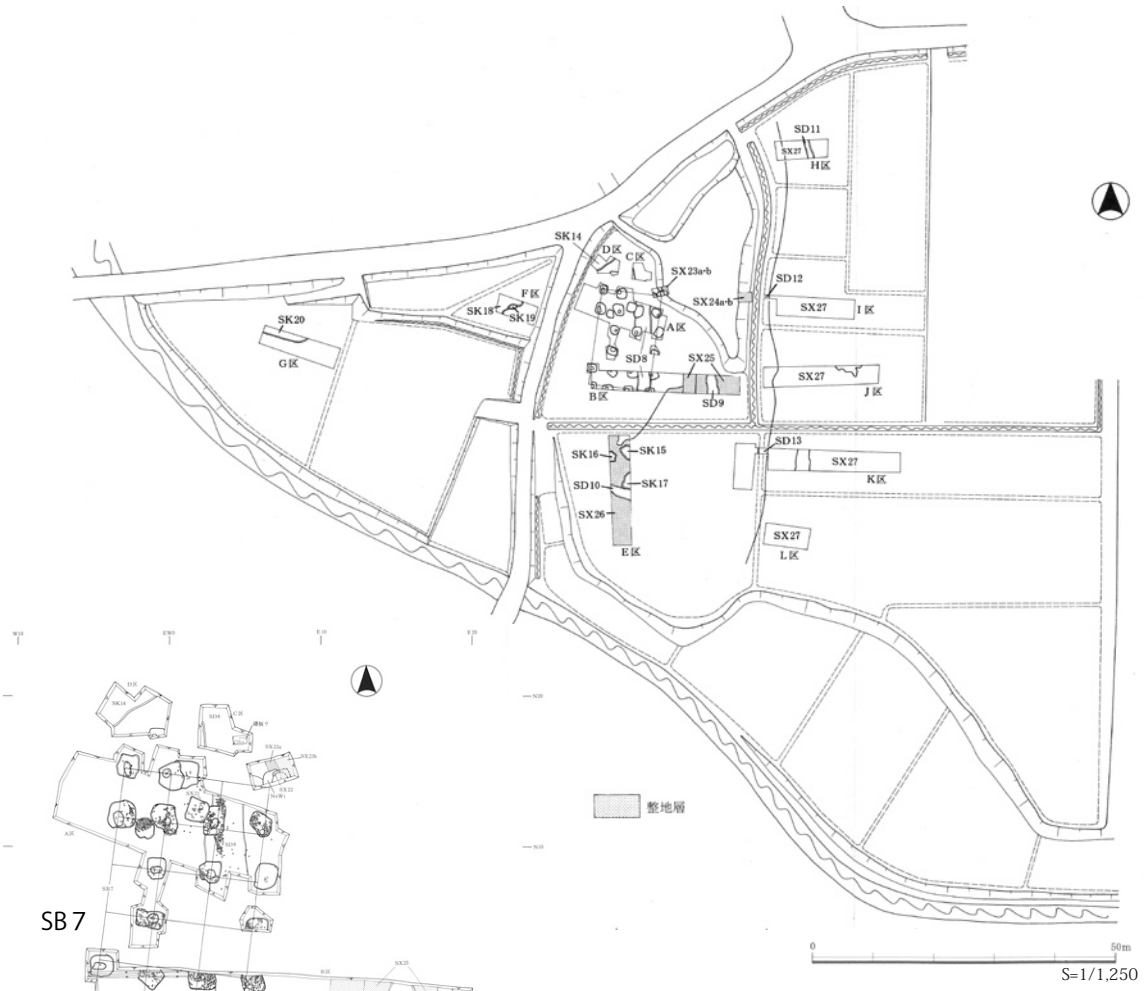
第２図　小寺遺跡、杉ノ下遺跡地形図（文献２）



第３図　小寺遺跡築地平面・断面図（文献１）



第４図　杉ノ下遺跡第１次調査全体図（文献２）



第５図　杉ノ下遺跡第２次調査全体図（文献２）

第６図　杉ノ下遺跡第２次調査Ａ～Ｄ区（文献２）